電経新聞
平成 24 年 9 月 17 日　掲載

地図にない「街」、重層的な現実としての街

中村 雅子

街や地域がどこにあるかなど、だれが見ても明白だと思われるが、実は街や地域は多義的で伸縮自在な存在である。

魅力ある街として私たちがよく思い浮かべる「下北沢」も、実際に地図に境界線を引いて示そうとすると、あれ?と迷ってしまう。

そもそも地図には正式な行政区画としては載っていないのである。にも関わらず鮮明に街のイメージが生まれてくるのは、メディアがしばしば取り上げたり、私たち自身がそこで街を体験する身体感覚、生活感覚があるからだろう。

住民の生活感覚とローカル・メディアが織りなす実践の中から生まれた街の有名な例に「谷根千」がある。最初は耳慣れなかった地名は、もともとは『地域雑誌谷中・根津・千駄木』という、東京都の東部に位置し、台東区と文京区をまたいで広がるエリアを生活圏として捉えたミニコミ誌の略称だった。

この地域は関東大震災や第二次世界大戦の被害を免れて、木造3階建の建築物や長屋、寺院など、古い建築物が残っていたが、80年代の開発ブームで急速に旧来の風情が失われつつあった。それを惜しんで、昔ながらのエリアの魅力を伝えようとした3人の地域住民がミニコミ誌を発行し始めたのである。やがて「谷根千」はHanakoなどのメジャーな雑誌やテレビでも取り上げられるようになり、ついに不動産広告でも「あの人気の谷根千エリア」と語られるように、商業的な価値さえ持つ街になっていった（その経緯は、岡村圭子氏などに詳しい）。

インターネットやソーシャルメディアの普及で、地域住民自らが情報の送り手となることが容易になった今日、住民自らが規定し、日常生活の実践の中で実感を形作るこのような街のイメージは、さらに大きな意味を持ってくるだろう。住民自身がウェブ情報発信や、まちづくり活動によって、独自の実践の単位として公式の地図にないまちを生み出した事例としては、フュージョン長池（東京都八王子市別所地区）、光ヶ丘団地（東京都練馬区）、幕張ベイタウン（千葉市美浜区）などがある。

コミュニティの範囲という話だけではない。メディアによって情報やイメージと融合した空間の生成は、GPSが装備されたケータイやスマートフォンの普及によって、さらに深化している。ツールを持つ人と持たない人の間で、街がまったく異なる空間として現れることについては、セカイカメラなどのジオメディア越しに映し出される風景を思い浮かべると理解しやすい。

映画や小説の舞台となった場所を訪ねるのは、古くから作品ファンの間で行われてきた活動である。しかし、これまではほとんどの場合、それらは個人的な体験や小規模なグループ内での共有にとどまっていた。しかし今日のアニメの「聖地」ブームに見られるように、その経験がソーシャルメディアによって同じような関心をもつ人々と共有され、また場所と紐づけられて、より大規模なコミュニティによる物理＝社会的空間を作り出す可能性が生まれている。

ソーシャルメディアの普及で、地域住民自らが情報の送り手となることが容易になった。日常生活の中で実感を形作る街のイメージは、さらに大きな意味を持つ。情報やイメージと融合した空間の生成は、GPSが装備されたケータイやスマートフォンの普及によって、さらに深化している。

なかむら・まさこ　東京都市大学環境情報学部教授。主要な関心・テーマは地域・コミュニティやユーザからみたメディア・情報システム。京都大学博士（人間・環境学）。

●この記事・写真等は電経新聞社の許諾を得て転載しています。
無断で複製等、著作権を侵害する一切の行為を禁止します。

東京都市大学グループ
学校法人 五島育英会